

# 殷代における政治勢力の分派

はじめに

甲骨文は、殷代後期につくられた文字資料であるが、その製作者には二つの系統があることが知られている。さらに、本稿第一章でも述べるように、その分派は文字にとどまらず、政治勢力にも及んでおり、殷代後期には王が二派から交互に擁立されていたと考えられる。つまり、文字の二派は政治的な二派を原因とする現象の一つだったのである。

殷代後期における政治勢力の二派については、拙稿「甲骨文自組の分群と全甲骨文の区分」<sup>①</sup>（以下、前稿とする）において明らかにしたように、甲骨文の初期からすでに併存していた。つまり、その起源は殷代中期に求められることになる。

本稿は、殷代後期の分派について、殷代中期にまでさかのぼって考察することを目的とする。

## 第一章 殷代後期の字体分派と政治的分派

甲骨文の区分研究は、一九三三年に発表された董作賓「甲骨文断代研究例」<sup>②</sup>に始まる。董作賓は、祭祀対象・人名・字体などから、甲骨文を第一期～第五期の五つの時期に区分した。

その後、陳夢家・島邦男により、甲骨文の区分や殷代後期の系譜に若

殷代における政治勢力の分派

干の訂正が加えられた<sup>③</sup>。また、李学勤らにより、董作賓の「第四期」が第一期に後続することが指摘された<sup>④</sup>。筆者は、二〇〇二年に拙著『殷王世系研究』<sup>⑤</sup>（以下、『世系研究』とする）において、これらの問題について確定作業をしており、具体的には図1のようになる（以下、時期区分は筆者のものを使用する）。

董作賓による殷後期系譜と分期（丸数字は期）

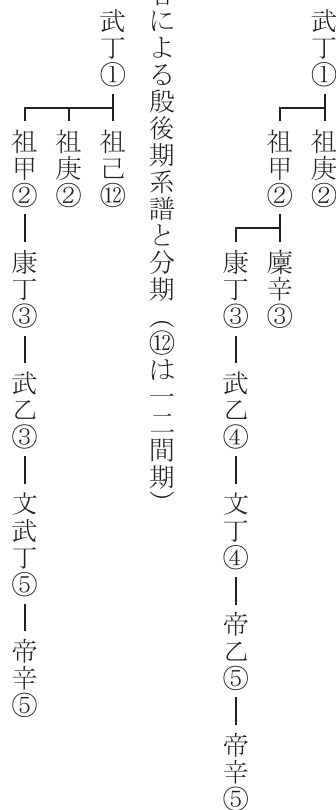


図1 甲骨文の時期区分

また、陳夢家は、貞人（甲骨占卜の担当者）についても分析し、同一時期の甲骨文であっても、複数の貞人グループがあることを発見した。具体的には、第一期に賓組・自組・子組・午組、第二期に出組、第三期に何組・無名組、第四期（筆者は一二問期とする）に歴組、第五期に黄組である。このうち、子組・午組は殷王以外の人物が主宰しており、「非王卜

落合淳思

「辞」と呼ばれる<sup>⑥</sup>。

さらに、陳夢家は第二期出組の貞人が性質の異なる三つ小グループに分けられることも発見し、兄群・大群・尹群と呼んだ。筆者は、拙稿「甲骨文出組・何組・黄組の分群と分類」<sup>⑦</sup>において、貞人の大の性質が兄群に近いことから「大群」を「中群」と改名した。

一九八〇年代以降には、甲骨文字の字体分類についても研究が進められ、林滢・黄天樹・彭裕商らにより、字体に二つの系統があることが明らかにされた<sup>⑧</sup>。その二派は、出土地から「村南派」「村北派」と呼称される。

黄天樹と彭裕商の分類は、二派が併存し、かつ甲骨文字の貞人組では自組が最も早いという点では一致しているが、継承関係については若干の違いがあり、おおまかには図2のようになる。

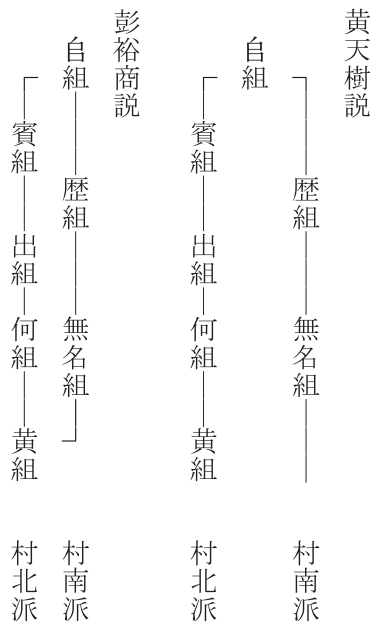


図2 甲骨文字の字体と継承関係  
(細部は省略)

黄天樹は、自組を兩派の開始点と見なすが、筆者は、字体が歴組に近いことなどから村南派と考える。また、彭裕商は、殷末期に村南派と村北派が合流したとするが、これは第五期を帝乙・帝辛とする旧説に基づくものである。実際には第五期は文武丁・帝辛であり、村南派には文武丁代における武乙に対する祭祀<sup>⑨</sup>があるので、村南派は殷末期まで村北派

から独立して存在していたことになり、筆者は継承関係を図3のように考える。

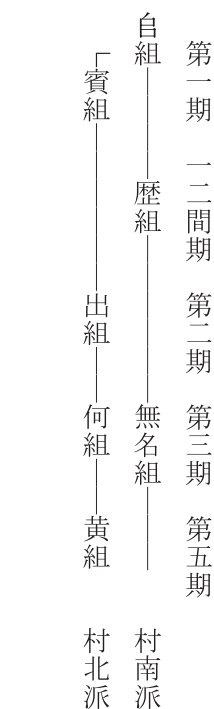


図3 筆者による甲骨文字の字体と継承関係

甲骨文字における二派については、字体とは別の面からの研究も行われており、一九四五年に発表された董作賓『殷曆譜』の「旧派・新派」説にさかのぼる。董作賓は甲骨文字に見える礼制や用語について、二種が交互に出現することから、それを革新・復古と考えた。

また、一九六〇年代には、張光直により、二派（張氏は「A組」「B組」と呼ぶ）から王を交互に擁立し、それを系譜上で擬制的に世代として扱ったことが二派の出現の原因とする説が提示された<sup>⑩</sup>。

しかし、いずれも字体や系譜の情報が不確かであった時代の説であり、結果は誤りであった。董作賓の説について見ると、後の研究が明らかにしたように、単一系統内部の革新・復古ではなく、二派が併存していた。また張光直の説については、殷代後期に擬制的血縁関係による継承が行われたという点では正しかったのだが、同一世代の祖己と祖庚・祖甲は実際には異なる派であり、逆に異なる世代の康丁・武乙や文武丁・帝辛は同一の派であるなどの矛盾があり、世代関係が出自の派に対応するという点が誤りであった。

筆者が前稿などで述べたように、「期」が異なると政治的な敵対関係なども変化することから、村南派・村北派という字体の区分は、単に貞人や契刻者（またはその集団）に二つの派閥が存在したというだけではなく、

その背景にある政治勢力にも二つの派閥があったことを想定しなければならない。

本稿では、便宜上、字体の村南派に対応する政治勢力も「村南派」と呼び、同様に字体の村北派に対応する政治勢力を「村北派」と呼ぶことにする（字体と政治勢力の峻別が必要な場合には、「村南派字体」「村南派勢力」のように区別する）。

つまり、殷代後期には村南派勢力と村北派勢力から交互に王が擁立され、それが擬制的に一つの系譜とされたのである。甲骨文字の数量から、殷代後期の王と出自については、図4のように推定される。

	第一期	一二期	第二期	第三期	第五期
村北派出自	武丁		祖庚・祖庚		文武丁・帝辛
村南派出自		祖己		康丁・武乙	

図4 殷王の出自

ところで、甲骨文第一期の王である武丁は村北派の出自であるが（図4参照）、先に述べたように、甲骨文字の字体は村南派の自組に起源を持つっており、一見矛盾するような結果である。

しかし、自組の貞人については、前稿で村北派と村南派に分群が可能であることを示した。具体的には、自組の主要な貞人である扶・自・勺・戴・诰の五名について、扶が村南派であり、他はすべて村北派であるという結果が得られた。筆者は、前者を扶群、後者を勺群と呼ぶ。

最も大きな特徴は、村南派に限って出土した小屯南地甲骨において、自組の貞人は扶だけが見られ、勺群が見られないということである。そのほか、村北派の賓組に特徴的な兆辞や牽強付会の解釈が、勺群に見られ、扶群に見られないことも挙げられる。字体でも、扶群は自組大字類

にも比較的多く見られるが、勺群はほとんどないという傾向の違いがある<sup>⑬</sup>。

要するに、自組は、字体は村南派であるが、占卜を担当した貞人には村南派・村北派が混在していたのである。このことから、次の二つが言える。

ひとつは、殷代後期の文字の分派は自組以降であるが、政治的な分派である村南派勢力と村北派勢力は、殷代後期の初めから併存していたということである。言い換えれば、殷代後期よりもさかのぼる殷代中期に二派の起源があったのである。

もう一つは、殷代後期における最初の王である武丁は村北派であるが、甲骨への刻辞技術、あるいは文字そのものの知識は村南派が豊富に持っていたため、第一期の初期において、村北派が村南派に学んだという推測ができることである。

## 第二章 甲骨文第一期の祭祀系譜

前章で述べたように、殷代後期の二つの政治派閥は、起源が殷代中期にまでさかのぼるものであった。

殷代中期については、『尚書』やそれに基づく『史記』殷本紀は、遷都を繰り返した時期としている。しかし、後述するように、甲骨文の系譜や考古学の発掘から、殷代中期は分裂期としてとらえるのが妥当である。

また、「殷代中期」の期間についても、『史記』殷本紀は「中丁より以来、適を廢して更ごも諸弟子を立て、弟子或もの争い相代り立ち、九世に比比乱れ、是に於いて諸侯朝する莫し」とし、中丁と陽甲（甲骨文では盤甲）の九代を混乱期とする（図5参照）。しかし、殷代後期の製作である甲骨文には盤庚・小辛・小乙の時代のものはなく、すべて武丁以後で

ある。また後述するように分裂は祖乙以降であるから、祖乙〜小乙の九人の王を殷代中期と見なすのが妥当である。



図5 『史記』殷本紀の系譜のうち中丁～武丁の部分

筆者は、すでに二〇〇二年に『世系研究』において殷代中期の系譜について分析をおこなっている。

『史記』殷本紀の系譜は、甲骨文第二期の祭祀系譜(図6参照)に類似しているものの、これは二次的に改編されたものにすぎない。甲骨文第一期の先王祭祀では、一二間期以降の祭祀系譜と異なり、祖乙〜小乙について世代や継承関係が全く明示されていない。

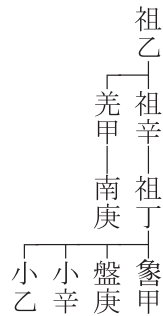


図6 甲骨文第二期の祭祀から復元した殷中期系譜(『世系研究』第三章)

第一期の先王祭祀について同版関係を統計すると、特定の組み合わせが多く、具体的には、祖辛・祖丁・小乙(a群)、羌甲・南庚(b群)、饕甲・版庚・小辛(c群)の三群に分けられる。ここから、殷王朝は、中期には分裂した状況にあったと推測し、二〇〇二年の段階では、筆者は図7のような継承関係を想定した。

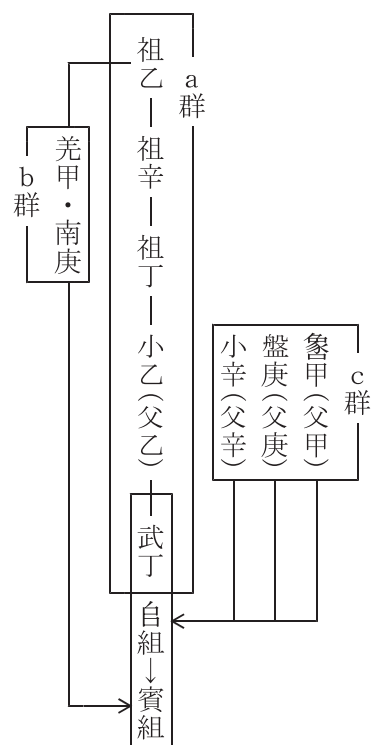


図7 『世系研究』第四章で推定した殷代中期の政治勢力

しかし、その後、いくつかの新しい事実が判明しており、若干の訂正が必要である。

図7では、c群(饕甲・盤庚・小辛)が第一期の祭祀では「父甲」「父庚」「父辛」と称されることから、いずれも小乙と同年代であり、祖乙につながるやいと見なした。しかし、改めて自組扶群の祭祀に限って見ると、「饕甲」「盤庚」の名が用いられていることが分かった。(小辛については自組でも「父辛」または「小父辛」と称されている)。

第五期を除いて、甲骨文では父輩の王は「父某」とされるのが一般的であり、固有の文字が称谓に付されることは稀である。したがって、饕甲・盤庚・小辛を武丁の父輩と見なすのは村北派によって改編された系譜認識であり、初期の村南派では「祖乙—饕甲—盤庚—小辛(父辛)」という直系の系譜が認識されていたと考えられる。

また、b群(羌甲・南庚)については、第一期には羌甲と南庚の組み合わせが多いことから、甲骨文第二期の系譜などに従い、「祖乙—羌甲—南庚」という直系の系譜と考えた。

しかし、二〇〇三年に公刊された近出の花園荘東地の子組甲骨(非王卜辞)では、男性祭祀対象に祖乙が最も多く六四片に見え、それに次いで羌

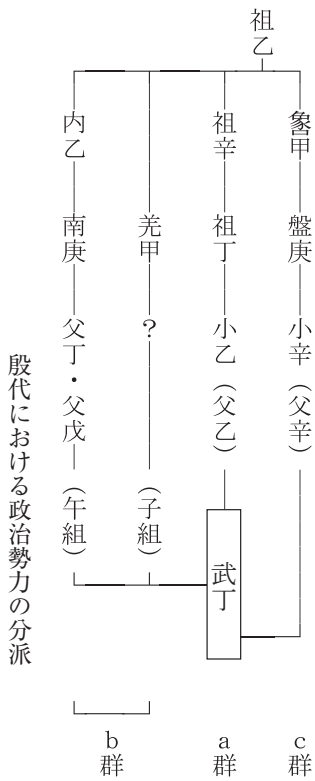


図8 甲骨文の最も早い時期の祭祀から復元した殷中期の系譜

甲を指すと考えられる「祖甲」が三十八片に見える。これに対し、南庚に比定しうる称谓である「祖庚」は僅か一例しかなかった<sup>⑤</sup>。つまり、子組の内部では、羌甲を直系とするが南庚は直系とされていなかったためであり、羌甲・南庚を父子関係とすることも、後に改編された系譜ということになる。一方、子組と同じく非王卜辞である午組には、南庚に相当する「祖庚」の称谓が比較的多く、他に「祖乙(下乙とも)」と「内乙(入乙とも)」が多い。したがって、午組では「祖乙—内乙—南庚」(または「祖乙—南庚—内乙」という系譜が想定されていたと考えられる<sup>⑥</sup>)。また、自組にb群の祭祀がないことから、筆者は「c群の勢力を統合→自組→b群系の勢力を統合→賓組」という時代順を想定していた。しかし、子組は字体も内容も村北派の賓組に近いことから、政治的にも近い関係にあったと考えられる。つまり、自組がb群を王と見なさないうのは、併合された時代の早晩ではなく、村南派と村北派という政治勢力の差異が原因ということになる。むしろ、子組や午組の系統は、早くに村北派に合流したため政治的に近い関係になり、最後にc群すなわち村南派が合流したと考える方が妥当であろう。以上から、甲骨文の最も早い時期の祭祀系譜を元に、殷中期の王統とその合流順を改めて復元すると図8のようになる<sup>⑦</sup>。なお、これはあくまでも各勢力が想定していた系譜にすぎないのであり、殷中期の実際の血縁関係であることは確言できない。

### 第三章 殷代中期の分裂

そもそも、殷代中期のa群(祖辛・祖丁・小乙)、b群(羌甲・南庚)、c群(畀甲・般庚・小辛)とはどのような存在だったのだろうか。

殷王朝の前期は、現在二里岡遺跡と呼ばれている都城を中心としていたと考えられており、正確な年代は明らかになっていないが、おおよそ紀元前十六〜十四世紀である。

その後、殷代中期については、文献資料では、『尚書序』が「仲丁囂に遷る」「河亶甲相に居り」「祖乙耿に圻る」「盤庚五遷し、將に亳殷を治めんとす」とし、遷都を繰り返したものと見なす。また、『古本竹書紀年』はこれに「南庚更に庇より奄に遷る(庇は耿にあたとされる)」<sup>⑧</sup>を加える。しかし、すでに甲骨文から明らかにしたように、殷代中期は分裂期であった。本章では、殷代中期の分裂状況について述べる。

近年、殷代中期(中商期とも称される)の遺跡が多数発掘されており、最大のものは、殷墟に隣接する洹北遺跡であり、そのほか、小双橋遺跡・藁城台西遺跡などがある。これらの遺跡の年代は、前期の二里岡文化と後期の殷墟文化を繋ぐ時代の紀元前十四〜十三世紀にあたることから、殷代中期の分裂は、王統だけではなく、地理的にも分裂したものであり、それぞれの派閥が独自の本拠地を持っていたと考えられる。

a群については、『世系研究』で述べたように、村北派の賓組によって重点的に祭祀されているので、村北派の祖先であろう。

そして、a群は殷代中期には洹北遺跡を本拠としていた可能性が高い。その理由は、分裂を再統一した武丁(村北派)が殷墟を拠点としたのであるから、殷墟に隣接する洹北遺跡が村北派の起源として最有力候補となるためである。従って、本稿はa群を洹北派と呼ぶことにする。

一方、c群、すなわち殷代後期に村南派となる勢力は、どの遺跡を本

拠地にしていたかは分からない。しかし、前述のように村北派(旧洹北派)が村南派の自組から甲骨刻辞や字体を学んでいたことから、村南派が甲骨刻辞に関する技術・知識を持っていたと推定できる。

ここで注目したいのが、殷代中期の甲骨文である。洹北遺跡からは、殷代中期の甲骨文は発見されていない。洹北遺跡の範囲内から出土した花園莊東地甲骨が殷代中期にさかのぼると期待されたこともあったが、すでに第一期のものであることが明らかになっている<sup>⑩</sup>。従って、洹北派は甲骨刻辞の知識がなく、のちの村北派であるという推定を支持する。

一方、殷代前期の二里岡遺跡からは刻辞された卜骨が出土しているが、「土羊。乙貞従受<sup>⑪</sup>。」と記されており、文法だけではなく「貞」字を使う占卜形式も殷墟甲骨文と同じである。つまり、二里岡期(殷代前期)には、すでに殷代後期に通じる甲骨占卜や甲骨刻辞の知識・技術が存在していたのであり、村南派は二里岡期の知識・技術を受け継いでいたことになる。村南派は、殷代中期の本拠地は不明であるが、殷代前期(二里岡期)の知識・技術を伝えた勢力だったことから、本稿は「二里岡派」と呼ぶことにする<sup>⑫</sup>。

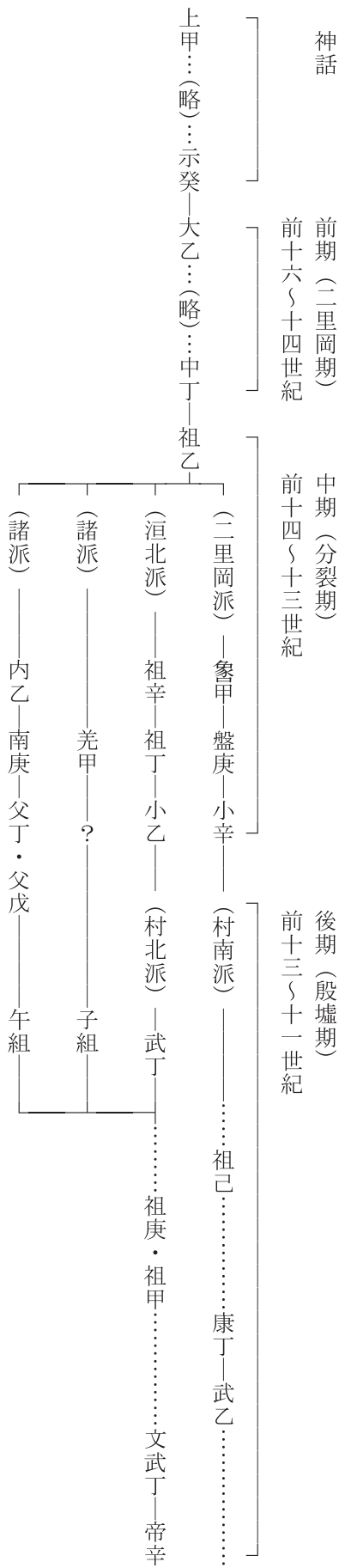


図9 本稿が復元した殷代の政治勢力

b群については本拠地などは不明なので、仮に「諸派」と呼んでおく。先に述べたように、二里岡派(c群)よりも早く洹北派の武丁によって統合されたと考えられる。

以上から、殷代前期から殷代後期に至る勢力関係を述べると、次のようになる。すなわち、殷代前期は二里岡遺跡を本拠とした統一政権であったが、殷代中期(祖乙以降)に分裂し、やがて洹北を本拠とする洹北派が諸派を統合し、最終的に二里岡派を統合したのである。これを図示するのが図9である。

上甲・□乙・□丙・□丁・示壬・示癸の遠祖(六示)については、その名が十干順で形式的であることから、神話上の存在であると考えられている<sup>⑬</sup>。

大乙から中丁(殷代前期)については、『世系研究』で述べたように、甲骨文第一期の祭祀では直系のみが祭祀対象であるから、甲骨文中後期の祭祀に見える卜丙(『史記』では外丙)や棧甲(『史記』では河亶甲)などの前期の傍系王は、殷代後期に系譜上に付加されたものと考えられる。したがって、殷代前期の王のうち、実在の可能性を論じることができ

るのは大乙・大丁・大甲・大庚・大戊・中丁の六名のみであるが、六代にわたる直系継承は作為されたものであるかもしれない、これすらも改編されている可能性がある。

祖乙（小乙（殷代中期）については分裂期であり、洹北派・二里岡派など、少なくとも四つの系統に分裂していた。

武丁以降（殷代後期）は、甲骨文の祭祀系譜や『史記』などでは、単一の血統のように記されているが、先に述べたように、殷代後期には二派（村南派・村北派）から王を擁立しており、系譜は擬制的な血縁関係にすぎない。

そして、この二派は、先に述べたように殷末期（第五期）まで併存していた。殷代中期に起源を持つ分派は、殷の末期に至るまで完全な統合は行われなかったのである。

なお、村南・村北各派の祭祀では、擬制的な父祖だけではなく、実際の父祖も祀られているが、各派内部（歴組・無名組、および賓組・出組・何組・黄組）の実際の父祖の祭祀系譜がつかない<sup>23</sup>。したがって、各派が擁立した王の間についても、必ずしも実際の血縁関係はなかったと考えられる。

ところで、甲骨文の先王祭祀を統計すると、上甲・大乙・祖乙・武丁の四者に対して多く行われている。上甲は神話上の始祖であり、大乙は殷の建国者とされる人物であるから、多く祭祀されるのは当然である。

祖乙については、『史記』殷本紀は「帝祖乙立ち、殷復た興る」とし、『古本竹書紀年』は「祖乙勝即位し、是れ中宗と為る」とし、甲骨文にも「中宗祖乙」という表現がある。しかし、実際には、祖乙が多く祭祀されたのは、祖乙が中興の祖だからではなく、分裂に際して最後の統一殷王だったからであろう。

そして、武丁の祭祀が多いのは、分裂を收拾し、殷を再統一した王だった

殷代における政治勢力の分派

たからである。

## 結び

本稿は、殷代中期の分裂状況を復元し、さらに殷代全期の政治勢力について述べた。殷代史は、おおまかに前期が統一期、中期が分裂期、後期が再統一と二派併存の時期と区分することができる。

殷代前期（二里岡文化期）は、それ以前の二里頭文化期に比べ、文化圏が飛躍的に拡大しており、支配圏も広がったと考えられる。

しかし、殷代中期には分裂が起こっており、その原因が支配圏の拡大そのものか、あるいは王統内部の問題かは分からないが、統一的な広域支配が維持できなくなったのである。

殷代後期（殷墟文化期）には、王朝としては一応の再統一が成されたが、しかし、二派が併存しており、血統としての統一には至らなかった。単一血統による王朝支配は、西周王朝にまで降ることになる。

## 附論1 王墓の被葬者特定

本稿は、殷王朝の政治勢力について論じたが、これに関し、二点の問題を加えて述べたい。一点目は、殷墟の王陵区の被葬者である。

殷墟の王陵区とされる地域は東西に墓葬が分かれている（図10参照）。

張光直は、A組B組の自説を元に、西の大墓をA組（盤庚・小辛・小乙・祖庚・祖甲・武乙・帝乙・帝辛）とし、東の大墓をB組（武丁・廩辛・康丁・文武丁）とした。

しかし、東側の大墓は一基を除いて王墓の特徴である亜字形墓ではな

く、また、考古学的な調査からも、殷墟そのものの造営が武丁以後であり、盤庚・小辛・小乙の墓はないと考えられている。<sup>26)</sup>

そのため、現在の考古学研究では、九基（西側八基（二五六七号墓は卣字形墓の製作途中で放棄）、東側一基）の卣字形墓を、武丁・祖庚・祖甲・廩辛・康丁・武乙・文武丁・帝乙・帝辛に比定する説が有力である。<sup>27)</sup>

しかし、これは『史記』殷本紀の系譜に従ったものであるが、先に述べたように、殷本紀の系譜は再編されたものであり、殷後期の実在の王は、武丁・祖己・祖庚・祖甲・康丁・武乙・文武丁・帝辛の八名であった。つまり、西側の大墓の数に対応している。

そもそも、東側に一基ある卣字形墓（一四〇〇号墓）は、他の王墓とは位置が離れている上に祭祀坑に混交しており、他の王墓と性質が異なっている（図10参照）。

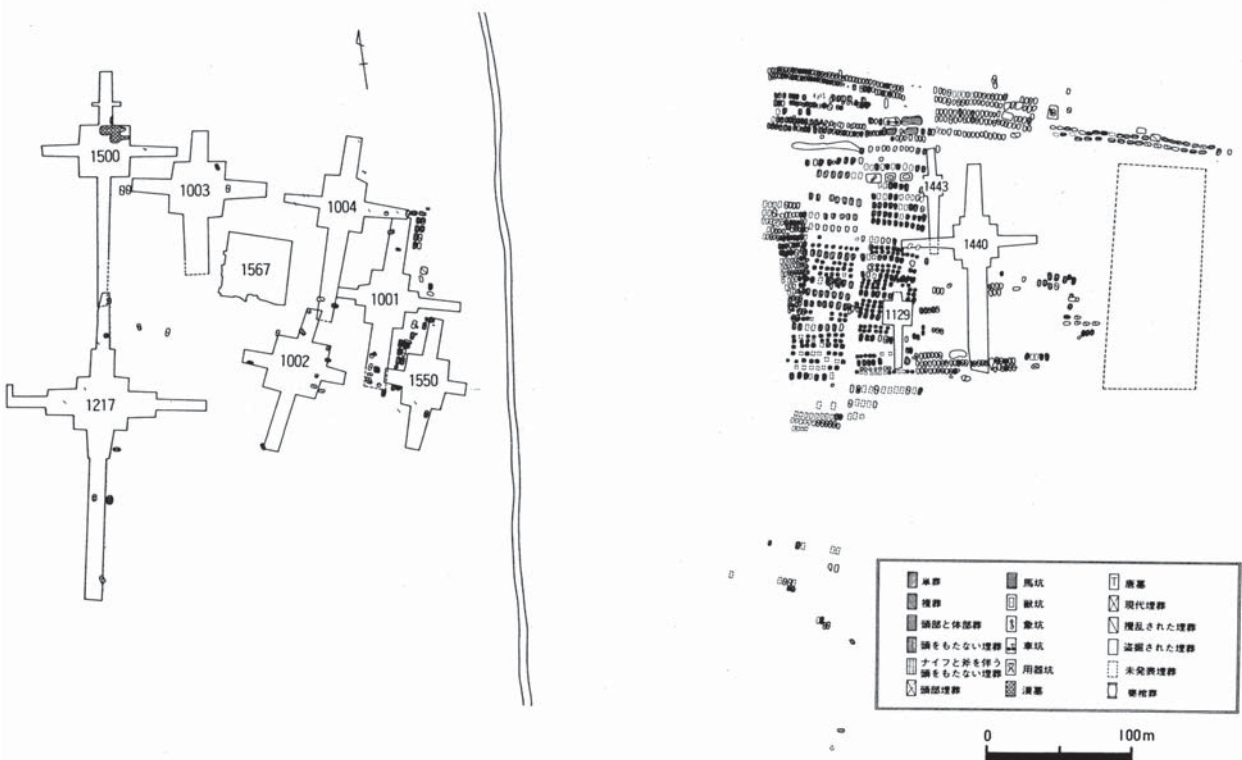
それでは一四〇〇号墓の被葬者は誰であろうか。卣字形墓が作られたということは、王に準ずる人物ということになる。また、一四〇〇号墓が造営されたのは、一〇〇一号墓・一五五〇号墓に続くと推定されているので、武丁・祖己に続き、第二期に死亡した人物ということになる。<sup>28)</sup>

これに該当する人物を甲骨文に求めれば、それは第二～三期の甲骨文中に見える「小王」であろう。

なお、第三期の例には「小王父己」という記述があり（『甲骨文合集』二八二七八、前半欠損）、従来は、これを「小王である父己」と解釈し、「父己」が祖己にあたることから、祖己が殷王ではなかったことの論拠とされていた。

しかし、「小王」の呼称は第一期にも見えるが、次のように「小王某」とは称されていない。

癸未卜：侑小王（『甲骨文合集』五〇二九、賓組）  
 戊午卜旬，侑小王（『甲骨文合集』二〇〇二二、自組）



9 図 西北岡の東・西区と侯家荘の墓址

図 10 殷墟王陵区（李濟『安陽発掘』（国分直一訳、新日本教育図書、1982年）119頁）



したがって、第三期甲骨文の「小王父己」も「小王である父己」ではなく、「小王と父己」と考えなければならぬ。

第三期の祭祀では、父己（祖己）や父庚（祖庚）と合祀されている殷王以外の人物として、次のように「中己」がある。

父己・中己・父庚、惟：（『小屯南地甲骨』九五七、後半欠損）

ここから、第三期の「小王」は「中己」であり、一四〇〇号墓の被葬者と考えられる。中己は、第三期に祭祀が多く（二〇例以上）、おそらく村南派の康丁の実際の父祖であろう。

このように、殷王の墓は、従来「王陵区」とされていた地域の西側の八基に限定されることになる。つまり、殷代後期には二つの派閥から交互に王が擁立されていたのであるが、墓葬については擬制的な系譜にあわせて一ヶ所に造営されていたのであり、名目上は単一の血縁として王位継承が行われていたことと合致する。

なお、王墓は時代順に武丁・祖己・祖庚・祖甲・康丁・武乙・文武丁・帝辛に対応することになるが、造営順には異説があるため、どの王がどの墓に埋葬されたのは確実ではない。今のところ、一〇〇一号墓が最も早く、武丁のものとする説が有力である。また、造営中に放棄された一五六七号墓は、殷の最後の王である帝辛（紂王）のものとするのが妥当であろう。

## 附論2 大乙と「成」「唐」

甲骨文の先王祭祀では、殷の建国者とされる大乙が「成」または「唐」と称されることがあり、次のような例がある。

翌乙酉、侑伐于五示上甲・成・大丁・大甲・祖乙（『甲骨文集』二四八）  
貞、禦自唐・大甲・大丁・祖乙、百羌・百宰（『甲骨文集』三〇〇）

殷代における政治勢力の分派

筆者は、これまで「成」「唐」を大乙の別称と考えていた。しかし、殷文化においては、死者は十干を付した称謂で呼称されるが、「成」「唐」は十干称謂ではない。つまり、例えば小乙が「后祖乙」と称されたり、あるいは祖甲が「帝甲」と称されたりするのは、根本的に性質が異なっているのである。

したがって、「成」「唐」は諡号としての大乙の別称ではなく、大乙の実名（後代で言う諱いみなにあたる）と考えなければならない。

しかし、名が二つあるというのは、それ自体が不自然なことである。また、甲骨文の祭祀の用例には偏りがあり、第一期には、大乙・唐・成の三つが併用されているが、村南派である一二間期の歴組では大乙・成のみが使われて唐が無く、逆に、村北派である第二期の出組では、大乙・唐のみが使われて成が無い。

このことから、元の主流である二里岡派（後の村南派）で建国者とされていたのは「成（諡号は大乙）」であると考えられる。一方、涇北派（後の村北派）には「唐」に関する神話があり、村北派の武丁によって、第一期に大乙と同一視されるようになったのであろう。そのため、一つの諡号である「大乙」に二つの神話である「成」と「唐」の称謂が混在したのである。

なお、殷の派閥関係にとらわれない周では、「成」と「唐」を合併して「成唐」と呼称しており、最も早いものは周原甲骨に見える。さらに、文献では仮借して「成湯」の文字が使われており、一般に「湯王」と呼称されるようになった。

## 注

- ① 『中国古代史論叢 第六集』立命館東洋史学会、二〇〇九年。
- ② 『慶祝蔡元培先生六十五歳論文集』（『中央研究院歷史語言研究所集刊外

- 編) 一、一九三三年。
- ③ 陳夢家『殷虛卜辭綜述』(科学出版社、一九五六年)、島邦男『殷墟卜辭研究』(弘前大学文学部中国学研究会、一九五八年)など。
- ④ 李学勤「殷虛五号墓座談紀要」(『考古』一九七七年第五期)など。
- ⑤ 立命館東洋史学会、二〇〇二年。
- ⑥ 現在までに、陳夢家が発見した子組・午組以外にも数種の非王卜辭が発見されている。
- ⑦ 『中国古代史論叢 第四集』立命館東洋史学会、二〇〇七年。
- ⑧ 林澧「小屯南地発掘與殷墟甲骨断代」(『古文字研究』九、一九八四年)、黄天樹「殷墟王卜辭的分類与断代」(天津出版社、一九九一年)、李学勤・彭裕商「殷墟甲骨分期研究」(上海古籍出版社、一九九六年)。
- ⑨ 中国社会科学院考古研究所『小屯南地甲骨』(中華書局、一九八〇年)第三五六五片。
- ⑩ 中央研究院歷史語言研究所、一九四五年。
- ⑪ 「商王廟号新考」『中央研究院民族学研究所集刊』(一五、一九六三年)、「殷礼中的二分現象」(『慶祝李濟先生七十歲論文集』上、一九六五年)など。
- ⑫ 甲骨占卜において、ひび割れ(卜兆)が出現した際の状況を記したものの。「二告」「小告」「不悟暈」などがある。
- ⑬ 前稿では、楊郁彦『甲骨文合集分組分類総表』(芸文印書館、二〇〇五年)の字体分類をもとに統計数値を提示したが、崎川隆「楊郁彦著 甲骨文合集分組分類総表」(『東洋学報』九〇、二〇〇八年)が指摘する通り、同書には誤りも多い。したがって、正確な統計数値の算出は、崎川氏により全面的に字体分類がやり直されることを待ちたい。もっとも、誤謬が多い楊氏の分類においてすら、大字類における出現は、扶群が一二九例中四五例(約三四・九%)、勺群は一五〇例中二例(約一・三%)と大きな差があるので、統計学的に見て偶発的に出現した数値とは言えない(分類に誤りが多いほど両者の値が縮まる確率が高く、逆に大きな差があれば確実に差があると認められる)。したがって、今後、両者の数値は改められるだろうが、大字類には扶群が多く勺群が少ないという点は確実である。
- ⑭ 簋甲は『甲骨文合集』(郭沫若主編、中華書局、一九八二年)一九九〇七・一九九〇八、盤庚は同一九七九八。
- ⑮ 中国社会科学院考古研究所『殷墟花園莊東地甲骨』(郭沫若主編、中華書局、一九八二年)二〇〇三年。
- ⑯ 『世系研究』および拙稿「古代中国における氏族の形成過程」(『立命館史学』二五、二〇〇四年)では、子組・午組の祭祀対象が数世代であることなどから、殷代におけるリネージ(長い世代にわたって実際の血縁関係を辿りうる社会集団)の未成立について論じたが、この両者が祖乙の子孫を自称していたのであれば、殷王以外の祭祀対象は自動的に数世代に収まることになる。ただし、両者ともに祖乙より前の先王祭祀は少ないので、近親者の祭祀を中心としていたことは確かである。また、殷代々西周初期の金文では、作器対象はほとんどが父輩であり、祭祀対象も三代以内にと収まる(四世代以上前の祭祀対象に言及するのは、確実には西周中期の史牆盤が最初である)ので、西周初期まではリネージが未成立であったという結論は変わらない。
- ⑰ 午組の父輩の祭祀は「父丁」「父戊」が多い。また子組には父輩の祭祀は「父甲」「父乙」「父丙」「父庚」「父戊」があるが、いずれも一〜二例と少なく、いずれが直系かは不明である(殷代には、父の同輩はすべて「父」と呼称された)。
- ⑱ 『太平御覽』卷八三皇王部が引用。
- ⑲ 『殷墟花園莊東地甲骨』など。
- ⑳ 訓読すると、「土に羊もちいんか。乙貞う、従えるに：：を受けんか。」となる。「土」は神名であり、殷墟甲骨文にも見える。羊は祭祀犠牲。
- ㉑ 甲骨の出土地から殷墟の地理的配置について考えると、村北派(元の洹北派)が洹北商城に近い村北地域に居住し、逆に、村南派(元の二里岡派)は洹北商城から遠い村南地域に居住したということになる。
- ㉒ 白川静『甲骨文の世界』(平凡社、一九七二年)など。
- ㉓ 『世系研究』および「甲骨文出組・何組・黄組の分群と分類」参照。
- ㉔ 『太平御覽』卷八三皇王部が引用。
- ㉕ 二里岡文化においては、殷文化に属する都城の分布範囲が急激に拡大する。なお、浅原達郎「蜀兵探原」(『古史春秋』二、一九八五年)は二里岡文化の文化拡大を「二里岡インパクト」と呼ぶ。

②⑥ 楊錫璋「安陽殷墟西北岡大墓的分期及有關問題」『中原文物』一九八一年三期。

②⑦ 曹定雲「論殷墟侯家莊1001号墓墓主」『考古与文物』一九八六年二

期、谷飛「殷墟王陵問題之再考察」『考古』一九九四年一〇期。

②⑧ 同右。

(本学文学部助教)